第3学年4組国語科学習指導案

授業者　臺野芳孝

1.単元名　物語をしょうかいしよう

 ～題名や場面をもとに、心の動きを読みましょう～

2.単元の目標

　・登場人物の心の変化を、言葉に基づいて考えようとしている。

　・物語の流れやエピソードの構成から、登場人物の思いや考えを考えることができる。

　・作品に仕掛けがあることに気付き、作品の面白さを味わう。

　・クライマックスや叙述の流れから、行間を豊かに想像し、友だちと考えを交流できる。

　・読み取ったことをもとに、「わすれられないおくりもの」を紹介する掲示物を書くことができる。

3.評価規準

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 国語への関心・意欲・態度 | 読むこと | 書くこと |
| ○登場人物のキャラクターと物語の筋の流れを関連付けながらよもうとしている。 | ○あなぐまの死を前後して、森の仲間たちの心情の変化とその理由を想像しながら読むことができる。○言葉の表す意味を、他の言葉と比べながら考えようとしている。○あなぐまの死への悲しみが消えて行くことについて、友達と考えを交流しながら作品を味わおうとしている。 | ○図書室前掲示板に掲示するために、学習してわかったこと、面白いと感じたことを伝える文を書こうとしている。 |

4.学習材

「わすれられないおくりもの」 スーザン=バーレイ 文・絵　小川仁央訳

　小学３年生の発達段階を考え、いろいろな作品にふれさせるではなく、過去に学習した教材の読み方を参考にさせたい。いくつかのエピソードがある物語として、「大きなかぶ」「きつねのおきゃくさま」などが想起できるとよい。物語について、自分の考えを友だちと交流しながら、読みの方法を身に付けるようにしたい。

　「アナグマさんはごきげんななめ」「アナグマのもちよりパーティ」は、同じシリーズなので、手に取って読める環境にしておきたい。

5.単元について

　　「わすれられないおくりもの」の作品のテーマは、「大切な仲間の死を受け入れる」ということである。あなぐまは死んでしまっても、あなぐまにから教わった知恵や様々なことは残る。森の仲間たち一人一人に残された「たからもの」を語り合うことで、いつでも、どこでも、だれと会っても、あなぐまの思い出に出会えることに仲間たちは気付く。死んでしまったあなぐまの思い出を共有することで、ずっとそばにいてくれるように感じることができたのである。一人一人の「たからもの」が、森の仲間たちへの「わすれられないおくりもの」へと変わるのである。そう感じたとき、あなぐまの願いであった「友達が悲しまないように」できたのである。あなぐまの「心はのこ」るという思いの意味がはっきりする。もぐらがあなぐまに「お礼をいいたく」なったのは、いつでもすぐ近くにあなぐまを感じることができるようになったからなのであろう。

 (1)教材について

　この教材で子どもたちに考えさせたいポイントを次のように考えた。

　・あなぐまの願いは、あとに残した友だちが悲しまないようにと、自分の死よりも、友達のことを尊重するのはなぜ？

　・あなぐまが死んでしまうが、死を怖いもの・嫌なものとして思っていないのはなぜ？

　・残された友だちは、あなぐまの死と重なるように、冬が来る。冬は動物たちにとってどんな季節なのか？

　・春になり、あなぐまの思い出話を語り合うが、４つの話が取り上げられているのはなぜか？

　・「たからもの」→「あなぐまがのこしてくれたもの」→「おくりもの」と変化しているのはなぜか？

　・もぐらが、最後にあなぐまといたおかで、あなぐまにお礼を言うのはなぜ？

(2)クライマックスに着目することで「主体的、対話的、深い学び」を創る

　　よく、物語の好きなところに着目して学習をするような指導が一般的な風潮であるが、それには反対である。ある意味主観的で、話し合いにならない。「そう感じたなら、そうなんだ」になってしまう。

クライマックスはどこかという視点で物語を俯瞰すると、筋の流れを考えたり、主要な登場人物の思いの変化を粗々つかんだり、物語の仕掛けが見えてきたりする。「主体的、対話的、深い学び」を実現させる手段となる。

　　前述の疑問については、「クライマックスはどこか？」という話し合いの中で見つけていくことになる。クライマックスを、はじめは「あなぐまが死ぬところ」と考える子が多いが、「きつねが悲しい知らせ」をするところに代わり、冬にもぐらが悲しんでいるところへと移っていく。更に、もぐらがあなぐまにお礼を言うところへと意見が変わるが、あなぐまの思いが実現し、森の仲間たちが悲しまないようになるのは、あなぐまの思い出を語り合うところだと気が付く。つまりこの物語は、あなぐまの死を乗り越えていく森の仲間たちの再生の物語であると気が付く。

　　一人一人にとっての「たからもの」だった思い出が、語り合うことにより「（豊かな）のこしてくれたもの」となり、一番悲しんでいたもぐらにとっても「おくりもの」となる。

　　あなぐまが、友達を悲しませないようにと願ったことも成し遂げられる。

(3)学習活動について

　言語活動としては、グループの話し合いを通して読み深め、クラス全体で話し合いながら物語の謎を解いていくことである。

話し合い活動としては、二者択一をする議論をするもの（一問一答型）と、全員でいくつもの考えをつないでいくもの（一問多答型）と、二種類の話し合い方をする。クライマックスの決定では前者を、エピソードの読みでは後者を使って、話し合い活動を進めていく。

「大きなかぶ」「きつねのおきゃくさま」などの学習で、出てくる人物の順番や、エピソードの発展性について学習している。

　　これに深くかかわるのが、動物たちの４つのエピソードである。もっと多くの話がされたと考えるのが妥当であるが、物語では４つのエピソードだけしか取り上げられていない。それはなぜか？そこが物語の肝である。４つのエピソードが何かを代表していると考えてみよう。すると、子どもの遊び、スポーツから身だしなみ、毎日の仕事へと変化している。また、教わった時期を考えると、ずっと以前から最近まで、季節も挿絵から推し量れる。秋、冬、春や夏、そして一年中のことになる。場所も、木陰や池、部屋の中と様々である。動物たちの周りには、いつでも、どこにでも、だれにでも、あなぐまの思い出があることを共有するのである。

6.児童の実態　　３年４組　男子１５名　女子１７名　計３２名

　明るく元気で学習意欲は高い子どもたちである。ただし、個々に見てみると、理解力・注意力に欠けるものや、多動など、全国どこにでもあるような課題を抱えた子も少なくない。お話を聞く、テーマに合わせてスピーチをするなどの日常活動を通して、国語の学習の種まきをしている。

　　物事を関連付けてよく考えたり、話し合う中で自分の考えを変えたり深めたりすることの楽しさも経験するようにしてきた。国語の既習教材でも、見方を変えることで物語の仕掛けの面白さや、作者がよく考えて物語の設定をしたり、言葉を選んだりしていることに気付くこともできた。

　　どうしても、語彙力や理解力に差があるため、話し合いを学力の高い子ども数人で進めてしまうことが考えられる。そこで、グループを使って意見をまとめる段階を設ける。クラスの話し合いでは発言しずらいが、グループ内での話し合いについてはハードルが低くなる。内言を外言化する上でも、考えを述べる機会をなるべく多くしてやりたい。

7.指導計画　（9時間扱い）

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 次 | 時 | 学習内容と活動 | 指導と評価 |
| 第１次　【表層のよみ】 | １ | ○題名について話し合い、どんな話か 想像する。 ○範読を聞き、初発の感想を書く。 ○一番心にのこった言葉や文に着目して感想を書かせる。  | ◎挿絵からも、あらすじや登場人物について想像させる。 ◎感想は、①気になる人物、②心に残ったこと、③クライマックスはどこか、④わからないこと、⑤気が付いたこと、の中から書けるものを書く。◆自分の感想を書いている。 |
| 家庭学習 | ○音読練習する。○意味の分からない言葉、読めない漢字をチェックする。 | ◎振り仮名が必要な児童は、少人数指導の先生にお願いする。 |
| ２ | ○初発の感想文を読む。○クライマックスはどこか個人で考える。 | ◎感想の傾向を説明する。◎クライマックスは、「あーんパンチ」のところ。一文にする。◆クライマックスを探している。 |
| 家庭学習 | ○音読練習をする。○クライマックスはどこか個人で考える。 | ◎音読カードを利用して、10回は読んでおくようにする。◎クライマックス候補は数か所あってもよいことを伝える。 |
| 第二次　【深層のよみ】 | ３ | ○クライマックスがどこか、クラスで話し合って決定する。 | ◎いくつかの候補を班で選び、話し合わせる。二択になるように分類し、議論がかみ合うようにする。◆自分の考えを述べている。 |
| ４ | ○前話を読む。○あなぐまの人柄や生き方について考える。〇あなぐまの死ぬ描写を読む。 ○なぜあなぐまは「長いトンネルのむこう」と書いたのかを考える。  | ◎あなぐまの人柄が表れている言葉や文に着目させる。◎「死」に対して心の準備ができているあなぐまの様子を表す言葉や文に着目させる。◆あなぐまの人柄や死に対する考え方を読み取っている。 |
| ５ | ○あなぐまの手紙を読む友だちの様子を読む。○冬の訪れと友だちの深い悲しみを読む。  | ◎挿絵を手がかりにして動物たちの気持ちを考えさせる。◎冬の情景と森のみんなの悲しみとを比較しながら読み取らせる。◆森のみんなの深い悲しみを読み取っている。 |
| ６（本時） | ○あなぐまの思い出を語り合う友だちの様子を読む。 ○なぜ４つのエピソードなのかを、違いを探しながら考える。 | ◎動物ごとの思い出を、違いを探して考えさせる。◆友だちの考えのよさに気付いている。 |
| ７ | ○あなぐまの残していった「わすれられないおくりもの」について考える。  | ◎「たからもの」「のこしてくれたもののゆたかさ」から「おくりもの」と変化しているわけを考えさせる。◆「わすれられないおくりもの」の意味について考えをもっている。 |
| 第三次【発展】 | ８ | ○物語の紹介掲示を作るための文章を書く。 | ◎図書室前掲示のため、一二年生でも読めるものにする。◆相手意識をもって書いている。 |
| ９ | ○カットを入れて紹介掲示を完成する。 | ◆学習したことを取り入れて掲示物を作っている。 |

8.本時の指導　（9時間扱い　本時６／９）

(1)本時のねらい

　・４つのエピソードの違いを考えながら、あなぐまの死の悲しみが消えて行ったことを読み取ることができる。

(2)展開

|  |  |
| --- | --- |
| 学習内容と活動 | 指導と評価 |
| 1.本時の場面を確認し音読をする。 | ○教科書P.120の4行目からP.124の５行目までを音読させ、本時で扱う場面を確認する。 |
| 2.あなぐまの思い出を語り合う友だちの様子を読むことを知り、だれのどんな思い出なのかを確認する。　 | ○挿絵を掲示し、もぐら、かえる、きつね、うさぎのおくさんの順も確認する。○分かりやすい問なので、発言をしなさそうな子どもを優先的に指名する。 |
| 3.４人の思い出の話であなぐまが死んだ悲しみは消えたと書いてあるが、どうしてでしょうか？　なぜ４つの思い出で悲しみが消えて行ったのかを、違いを探しながら考えよう。 | ○もっといろいろな話があっただろうことが考えられれば良い。ただし、取り上げられているエピソードは４つだけである。この４つのエピソードがその他の話を含め象徴的に取り上げられていることを知らせる。 |
| 4.まず、４つのエピソードの違いについて、どういう点に着目するかの例を聞く。 | ○もぐら、かえる、きつね、うさぎのおくさんの年齢について考えさせる。もぐら、かえるは子どもであり、きつね、うさぎのおくさんは大人であることが分かる。 |
| 5.４つのエピソードの違いについて個別に考え、１つでも違いが見つかったら赤帽子をかぶる。　【個別に読む時間は３分間程度】 | ○動物ごとの思い出を、違いを探して考えさせる。違いは５つ以上あることを伝える。○書かれていることや挿絵を参考にさせる。○グループ全員が帽子をかぶったら、グループの話し合いを始める。 |
| 6.グループで話し合う。【３分間程度】 | ○意見が少ないグループにはヒントを与える。○以前か最近か、男女、季節、場所、遊びと仕事、毎日とたまに、などの違いがある。グループごとにヒントは変えておく。 |
| 7.クラスで話し合う。 | ○いくつ見つけられるかを目標　　にするよう仕向け、同じ意見も重複して発言していいことにする。また、話し合っているうちに気付いたことも発言する。◆友だちの考えのよさに気付いている。 |
| 8.出てきた違いについてまとめる。　　あなぐまの思い出は、子どもにも大人にも、男にも女にも、いろんな季節にも、遊んでいても仕事をしていても、森のいろんな場所に溢れている。　　いつでもどこでも誰とでも、あなぐまの思い出があるから、悲しみは消えて行ったのだろう。 | ○知恵や工夫で助け合えたことも押さえたい。◆４つのエピソードが森の仲間たちの様々な思い出　を代弁していることを理解した。 |
| 9.次時は、「たからもの」→「あなぐまがのこしてくれたもの」→「おくりもの」と変化しているのはなぜか？について考えることを伝える。 |  |

中学年の「よみ」の学習

子どもたちに確かな読みの力を育てる授業

千葉市立北貝塚小学校　臺野芳孝

**「わすれられないおくりもの」**

**１．文学作品のよみ方**

　「よみの力」を鍛えるには、子どもたちに段階的に物事を考えるためのツール「よみの方法」を与えることが必要である。漫然と文章を眺めながら思ったことを発表するような授業では、「よみの力」を鍛えることはできない。子どもたち一人一人が説明することに関して自分なりに理解していること、自分の考えを伝えたいと思うこと等を、意見の交流や討論の場で話し合うことで、子どもたち自身が「よみの力」を駆使しようとする。うまく説明できない場合は教師が補足してやりながら考えを述べさせる。

**【表層のよみ】**

①　ＣＤを聴く　感想を書いて発表しあう　語句の意味　音読練習

　　→何について書いてあるか、大まかに知る段階

**【構成・構造よみ】**

②　構造表をもとに「発端・山場・クライマックス・結末」などの構成・構造をよむ

　　→発端や物語の顛末、盛り上がりや大転換点について考える段階

**【形象よみ】**

③　登場人物と他の人物やできごととの関係の変化をよむ

　　→文や語に即してイメージを膨らませていく段階

　　　設定や背景を読み取る

　　　主要な人物の変化や、できごとの流れの変化を読み取る

**【主題よみ】**

④　クライマックスや後話・題名などから物語の主題をよむ段階

　　→主題はひとつではない。様々な角度から物語の意味を考える。

**【吟味よみ】**

⑤　書かれていることがどういうことなのか批評的に検討する段階

→冒頭よみ　題名よみ　色彩語　文体　象徴性・寓意性

小学校低学年であれば、③まで、中学年では④までの学習で十分である。文学作品の吟味よみについては、研究段階であるので提案にはかかわらないこととする。

　　構造表（おはなしの山）　　※おはなしの山は低学年向け

●冒頭（はじまり）

導入部

（前話）

●発端（おこり）

　　　展開部

　　（広がり）

　　　　　　　●山場の始まり　（山ばのはじまり）

　　山場の部

　　（山場）

　　　　★　　　　クライマックス

●結末（むすび）

終結部

（後話）

●終わり（おわり）

　　　　　　　※導入部や終結部のない作品もある。

**２．話し合いの仕方**

よみを深めていくには、話し合いが不可欠である。ただし、いきなりのクラスでの話し合いでは、一部のよくわかった児童と教師とのやりとりで終わってしまう。そこで、話し合いの前に、自分の考えをノートに書かせる等の時間を必ず取る。ここで、国語が苦手な子には助言やヒントを与える。

次に班（３～４人のグループ）で話し合わせる。その後、クラス全体の話し合いをするようにする。クラス全体の話し合いの際は、班を指名し、その中で順番に発言するようにすることと、全員発言を目指させるように仕組む。

話し合いには、大まかに分けて二つの方法がある。一つは、意見交流である。意見交流は、課題やテーマに沿ってなるだけ多く意見を出し合うものである。人によってものの見方・考え方が違うこと、一つのことから様々な考えが導き出されることを、話し合いを通して楽しみながら体験することである。

　もう一つは、討論である。討論は一つの課題・テーマについて、二つの考え方に絞って根拠を述べながら話し合う方法である。この場合は、賛成・反対意見を述べながら話し合い、自分たちの意見を変える場合は理由を述べるというルールを作っておく。複数の意見がある場合は、問いに合わないものを削除していく。最後の２つの意見になってから討論になる。

**３．「わすれられないおくりもの」の授業**

　あなぐまが死に、残された動物たちが大きな悲しみに包まれる。しかし、あなぐまの思い出を、動物たちが互いに話すうちに悲しみが消えていくというストーリーである。もぐらは紙を切って作るもぐらのくさり、かえるはスケート、きつねは初めて教わったネクタイの結び方、料理上手　なうさぎの奥さんは、初めて教わったしょうがぱんの作り方について語り合う。話をしていくことで、あなぐまの死という悲しみが消えていったというのである。

　この話の流れ、語り手の順番や、あなぐまに教わったことの順に、悲しみが消えていく理由がある。

　ここの場面は、意見交流をしながらより多くの意見を引き出すことを目的とした話し合いをさせたい。実際の授業では次のようなやりとりを行った。

**教師**　この場面では、登場人物があなぐまに教わったものを語り合い、悲しみが消えていくということなのですが、どのようにして悲しみが消えていったと思いますか。

**子ども**　・・・・・・。

教師　（左の表を提示する）

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| うさぎ | きつね | かえる | もぐら | 人物 |
| 料理 | ネクタイの結び方 | スケート | 紙のもぐらのくさり | おそわったこと |
|  | どんな変化があるか |

**教師**　出てくる順番にヒントがあります。「もぐら、かえる、きつね、うさぎのおくさん」の順で、どんな変化や　違いがあるのかを考えてみましょう。少なくとも５つはあります。まず、自分で考えてノートに書いてみましょう。時間は３分です。では、どうぞ。

**子ども**　（３分間考えノートに書く）

**教師**　では、今度は班で話し合います。いくつ見つかるでしょうか。司会を決めてください。司会は「○○さんどうですか」と指して意見を出させてください。班で納得　したらメモをしてください。

**子ども**　（話し合う）

**教師**　では、聞いてみましょう。３班。

**子ども**　もぐらとかえるは子どもで、きつねとうさぎは大人だと思います。

**子ども**　同じです。

**教師**　うさぎはおくさんだからそうですが、きつねはどうして大人だとわかりますか。６班。

**子ども**　きつねがネクタイをしているので大人です。

**子ども**　６班に付け足しです。「きつねは子どもの頃に…」と書いてあるので、今では大人です。

**教師**　もぐらとかえるは子どもでいいですか？

**子ども**　最初の場面で、もぐらとかえるはかけっこをしているので、たぶん子どもだと思います。

**子ども**　大人はかけっこをしないし…。

**教師**　なるほど、最初の場面をよくよみましたね。他には？１班。

**子ども**　教科書の絵を見ると、もぐらが出ているのは秋の葉っぱの頃で、かえるは冬、きつねはよくわからないけど青い空で春、うさぎもわからないけど、秋冬春夏の順になっていると思います。

**子ども**　きつねが腕をまくっているからそっちが夏。

**教師**　季節が違うという見方はおもしろい。いいことに気がつきましたね。他には？はい、８班。

**子ども**　もぐらは土の中で、かえるは水の中とか葉っぱと　かで、うさぎときつねは、地面の上と巣穴で、下から上　になっていると思います。

**教師**　場所が違うってことですか？

**子ども**　考えすぎー。

**子ども**　でも、住んでいる場所は確かに違うかも。

**教師**　ひとまずＯＫということにしますか。他には？２班。

**子ども**　かえるは両生類ですよね。あとはほ乳類で…。

**子ども**　順番、関係なくない？

**教師**　順番には関係がないようですが、おもしろいですね。よくほ乳類なんて知っていました。他にありますか？

**子ども**　まだ、３つかー。

**教師**　もうない？大人と子どもに関係することがあるんだけどなあ。

**子ども**　ヒントは？

**教師**　わからないかなあ。では、いつ教わったでしょう？

**子ども**　きつねは子どもの頃。

**子ども**　うさぎはずっと前。

**子ども**　あっ、そうか。かえるともぐらはまだ子どもだから、ずっとまえではないんだ。

**子ども**　だんだん、昔に戻っている。

**教師**　あと１つだね。教わったことを考えてごらん。

**子ども**　もぐらのくさりとスケートは遊びで、ネクタイと料理は仕事に関係してる。

**子ども**　もぐらのくさりは、毎日しないし、スケートは冬だけど、ネクタイや料理は毎日する。

**教師**　いっぺんに２つも見つけましたね。あなぐまが残してくれたものをみんなが出し合いました。語り合ってみるとあなぐまが残してくれたものは、森の中に…。

**子ども**　いっぱいある。

**子ども**　冬でも夏でも。

**教師**　では、あなぐまが教えてくれたことから、悲しみが消えていった理由を考えましょう。森の動物たちは、どう思ったかを、「子ども→大人」「秋冬春夏」など、みんなが見つけたこと　をもとにして、ノートに書いてみましょう。

　この後、子どもたちは、見つけた言葉をもとに、あなぐまの教えてくれたことをノートに書いていった。

　子どもたちに、「よみの方法」を与えることで、より具体的に物語を読み解くことができる。本稿の場合、描写の順序に目をつけるという方法で、登場人物の心情を理解し物語を味わうことができたといえる。

　物語文の読み取りの過程での発見は有効である。意見交流の場で様々な考えを述べ合い、話し合いで出てきた言葉を組み合わせながら、自分の考えを書く作業をしていく。小学校下学年の子どもたちが、物語の楽しさ、読みのおもしろさを感じながら、説明することができるようになっていく。

　以下、子どもが書いた死の悲しみが消えていった理由である。

　ぼくは、森の動物たちがあなぐまの思い出を話し合ったことで、あなぐまが死んでしまった悲しみが消えたことがわかりました。あなぐまは、むかしから今まで、動物たちにいろいろなちえを残しました。それは、おとなでも子どもでもだれにでも、どんな季節でも、森のいろいろな場所でも、あなぐまのちえが感じられるからです。あなぐまが死んでいなくなっても、あなぐまがいつでもそばにいてくれるように思うことができたのだと思います。さみしいけれど、一人一人のたからものが、森の動物みんなへのおくりものになったからです。